南フランスの昆虫たち

▼大杉栄訳『昆虫記』第１巻

▶南フランスのサン・レオンにある ファーブルの生家跡と銅像

特集

ファーブルにまなぶ

ファーブルを知らない人はいないでしょう。『昆虫記』10巻をすべて読んだという人は少ないかもしれません。でも『昆虫記』の一部、子ども版『ファーブル昆虫記』や教科書での引用、『昆虫記』の要約版の本など、誰もが『ファーブル昆虫記』を読んでいると思います。2007年はファーブルがその『昆虫記』第10巻を刊行して100年目の年だったのです。

上席総括学芸員（博物館学）
布谷知夫

フランス国立自然史博物館と協力

この「ファーブル昆虫記100年」を記念して行われている展示会は、琵琶湖博物館とフランス国立自然史博物館との協力関係の締結から始まりました。2003年8月にパリで両館の協力関係についての覚書が交換されたときに、具体的な事業を行おう、ということになり、フランスではその名前を知っている人すら少ないのに、日本ではそれこそ知らない人がいないというファーブルについて展示会をしようということになりました。

そして2005年に日本国内での共催館が決まりました。よくある巡回展示のようにどこかが展示会を作って、それを巡回させるのではなく、共催する博物館が一緒に展示を作り、さらにその共通の展示に加えて、各館が自分の館として展示したい部分を付け加えて、展示会を行うことになりました。日本では、北海道大学総合博物館、国立科学博物館、北九州市立いのちのたび博物館、滋賀県立琵琶湖博物館、兵庫県立人と自然の博物館の順番で巡回展示を行い、その後、フランスで展示をする事になったのです。琵琶湖博物館での展示は2008年4月29日から8月31日まで行います。

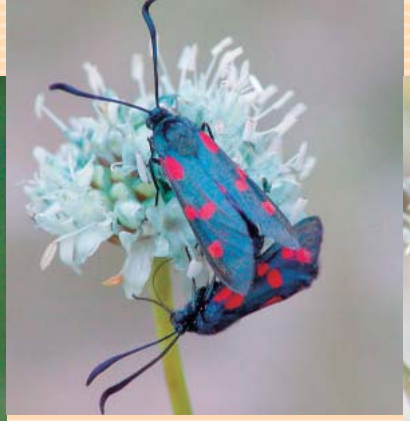
ファーブルが日本で人気がある理由

そもそもファーブルは、日本でなぜこんなに人気があるのでしょうか。それには二つの理由があるように思います。

ひとつは日本人のもともとの生活観として、自然と一体になった暮らしを好んでいたことです。若菜つみ、ホタル狩り、紅葉狩り、虫の音などが季節の生活の中に位置づけられ、日本の文学、芸術などのあらゆる場面で自然と一体になることが意識されています。昆虫についても、自然の一部として扱ってきました。そういう日本人の性質は、ファーブルが観察を続けてきた昆虫の生活を知ることとうまく一致し、受けいれることができたのだろうと思います。

もうひとつは、ファーブルの研究の姿勢が日本人の感性と一致したということです。ファーブルは苦学して勉強し教員になりましたが、その熱心さが周囲の理解を得られず、無職となりながら、独学で勉強を続け、昆虫の観察をして30年近い歳月をかけ『昆虫記』10巻を完成しました。特別な肩書きのないファーブルが努力して世界に認められる業績をあげたこと、その方法が地道な観察によるということに、多くの日本人が注目したのでしょう。

もちろんその前提としてファーブルの観察の魅力とそのすばらしい文章があることは間違いありません。



『昆虫記』翻訳の歴史

『昆虫記』10巻の刊行は１９０７年、日本にファーブルが最初に紹介されたのは、１９１８年、後に農民運動や労働運動などで有名になった賀川豊彦によるものでした。そして１９１９年にはファーブルの著書である『蜘蛛の生活』が翻訳され、『昆虫記』第１巻は１９２２年に無政府主義者であった大杉栄によって翻訳出版され、数名の翻訳者の手によって１９３１年には10巻までが出版されました。

そして、１９３０年前後までに、『ファブル科学知識全集』、アルス社版『ファーブル昆虫記』、岩波書店版『ファーブル昆虫記』などの出版がされ、そのほかのファーブルの著作も翻訳されています。

まだそれほど出版物もなく、科学読み物というものも少なかった時代に、個人の翻訳がこれほど集中したことは、ファーブルの観察が注目を集めた結果でしょう。

ファーブルの研究態度は、徹底して実証的でした。何か疑問に思ったことがあると、曖昧（あいまい）にしたり、誰かに聞いて終わりにするのではなく、観察をし、疑問が解決するまで実験をし、実験の結果を分析しながら新しい実験を考え、納得ができるようになるまで観察と実験を続けました。実験するための道具を考案し、小さな昆虫の解剖やスケッチもしています。

例えばファーブルが最初に興味を持ち、観察し、論文を発表した昆虫はカリバチでした。カリバチは他の昆虫を狩り、幼虫の餌として自分の巣に持ち込みますが、何週間も腐敗しないのは、親バチが防腐剤を注射するためであると考えられていました。そのことに興味を持ったファーブルはカリバチの行動を観察して疑問を持ち、狩の瞬間を観察し、実際に昆虫を針で傷つけたり、解剖したりしました。その結果カリバチは昆虫を殺して防腐剤を注射するのではなく神経節に針を刺すことで、昆虫を麻痺させて動けなくしていることを発見しました。

ファーブルはこのような実験と観察を繰り返して、約30年をかけて全10巻の『昆虫記』、フランス語での原題は『昆虫学的回想録』を書き上げたのです。

『昆虫記』以後の100年を紹介

今回の企画展示のタイトルは「ファーブルにまなぶ」としました。実はファーブルに関する展示会は日本ではこれまで何度も行われています。ですが、今回の展示は、ファーブルとその業績を紹介するものではなく、ファーブルの研究態度から学びながら、彼が『昆虫記』を書き上げてから１００年の間に、昆虫学、あるいは自然との接し方がどのように発展してきたのかを考えてみようという内容になっています。

そのため展示会では大きく三つのゾーンを設けています。最初のコーナーは「昆虫記の世界」です。ファーブルが扱った代表的なタマオシコガネやカリバチなどの昆虫とその生態などを紹介します。二つ目のコーナーは、「ファーブルの時代と日本」です。ここではファーブルが活躍した時代や場所、そしてファーブルが日本に紹介された時代背景などを紹介します。そして、次のコーナーがこの展示会の中心で「１００年後の昆虫記」です。ファーブルの研究態度から学んだ日本の「ファーブルの弟子」たちの研究やこの１００年間の昆虫研究などを紹介します。

また琵琶湖博物館が追加する展示は、研究団体や個人の活動紹介、昆虫観察の実際のテーマ紹介、身近な小さな発見を紹介する展示、スケッチコーナーなどを考えています。「ファーブルにまなぶ」展を見て、自分の発見をしてみませんか。

第16回企画展示

『昆虫記』刊行100年記念日仏共同企画

ファーブルにまなぶ

4月29日(火)～8月31日(日)

■場所：博物館企画展示室